

## ヴェンデルとヴァルスイエーデ -スウェーデン・ウップランド地方の二大船葬墓群-

角谷 英則

はじめに

北欧史・スウェーデン史研究においては、鉄器時代後期は2期に区分されており、その前半(550年頃から800年頃)がヴェンデル時代、後半がヴァイキング時代(800年頃から11世紀半ば)と呼びならわされている<sup>1</sup>。この前者、「ヴェンデル時代」に名を与えているのが、ウップランド州北部のヴェンデル教区教会内にある墓群である。1880年代、境内から副葬品の豊かな一群の墓が発見され、発掘の進展にともなって、1922年から「ヴェンデル時代」という言葉が使われるようになったのである<sup>2</sup>。この墓群では、十数基の船葬墓(båtgrav:「舟葬墓」とも呼ばれる)、すなわち船体を他の副葬品・被葬者といっしょにそのまま地中に土葬する形の墓が中心をなしており、スカンディナヴィアでも比較的珍しい船葬墓域(båtgravfält)を形成している。

ヴェンデルのほぼ真南、ガムラ・ウップサーラの北にも、ヴァルスイエーデと呼ばれる船葬墓域がある。ここには6世紀から11世紀、したがってヴェンデルと同時代の船葬墓が14基あり、副葬品等の状況もヴェンデルのそれと酷似している。

ヴェンデルとヴァルスイエーデは、ともにウップランドという中世初期の政治過程展開上の中心地域に位置しており、さらにそれほど一般的でない葬制をとっていること、きわめて豪華な副葬品がみられることから、その史的評価は北欧史研究上、重要な問題となっている。以下においてはその発掘調査・研究の状況を概観し、両船葬墓域の位置づけについて再論する。

### 副葬品の状況

ふんだんにほどこされた装飾(「ヴェンデル様式」と名付けられている)をともなうヴェンデル出土の副葬品には非常に多様である<sup>3</sup>。たとえば盗掘を逃れている第一船墓の場合、約10メートルの舟、武具(剣2本、ナイフ、兜、槍先、鏃、盾)、多数の調理器具・食器(4つ以上のガラス容器、取っ手のついた鉄製大鍋、大匙、鉄串、火箸)、多数の家畜(豪華な馬具をつけた馬3頭、犬3匹、牛、雄豚、雌豚、羊)、道具

<sup>1</sup>ただし、ヴァイキング時代の開始期が8世紀半ばごろまで、あるいはそれ以前にさかのぼることを示す資料がえられはじめています。

<sup>2</sup>Lundström, Agneta, "Vendel och Vendeltid", i Sandwall, Ann(red.), *Vendeltid*, Stockholm, 1980, s.11

<sup>3</sup>id, "Gravgåvorna Vendel", *Vendeltid*, s.31-44

類（斧、槌、小型ナイフ、鋏、ピンセット、砥石、鎖）が確認されている。他にはゲームの駒、ガラス製ビーズ、バケツなどがあり、日常生活に関するものも豊富にみられる。ヴァルスイエーデの出土品もほぼ同様の構成であり<sup>4</sup>、武器類の多さを特徴として挙げられる。ヴァルスイエーデは比較的遅い時期に全域が調査されており、またここはあきらかに盗掘を受けていないため、資料としての確度は高い。この点、ヴェンデルと状況を異にする。

両船葬墓域の年代については見解が分かれている<sup>5</sup>。たとえば、ヴェンデルに関しては、その時間的範囲をそれぞれ 520 年～750 年・600 年～720 年・575 年～800 年とする研究がある。ヴァルスイエーデの船葬墓も、研究によってやや幅はあるが、ほぼ同時期に属するものとされている。

合わせても 30 基ほどにしかならないこれらの船葬墓域が代表的な遺跡としてあつかわれていることからわかるように、船葬という葬制は通常の埋葬方法から大きく「逸脱」した「例外<sup>6</sup>」である。先史時代より人口分布の中心であったスウェーデンのメーラル地方（現ストックホルム県周辺）でさえ、上の 2 墓域をのぞくと、他にはアルシケのトゥーナ（3 基）、ウルトゥーナ（3 基）、バーデルンダのトゥーナ（8 基）、シェーピングのノシャ（15 基）、ガムラ・ウップサーラ（4 基）などしかない<sup>7</sup>。同時代に生きた大多数の人々の墓は簡素な火葬墓であるから、副葬品の豊かな船葬墓域<sup>8</sup>には社会のある階層のごく一部の人々だけが葬られたと考えられている。

### 船葬墓をめぐる議論

このような船葬墓域が造営された歴史的・社会的背景はいかに理解されるであろうか。これらの船葬墓（域）そのものの解釈は、発見直後からさまざまな方面よりなされてきた<sup>9</sup>。ヴェンデルの船葬墓群が発見され、それが唯一の知られた船葬墓群であった 20 世紀初頭、その被葬者はスヴェーアの諸王とされ、多分に伝説的なイングリング王家と関連づけられた。その後、ヴァルスイエーデなどが発掘されると、被葬者は「大農民」や「豪族」、「海軍役制度 *ledung*」の「下級指揮官」な

<sup>4</sup> Arwidsson, Greta, "Valsgärde", in Lamm, J.P., Nordström, H.-A. (eds.), *Vendel Period Studies*, Stockholm, 1983, p.75, id. *Die gräberfunde von Valsgärde I, Valsgärde 6*, Uppsala, 1942, id. *Die gräberfunde von Valsgärde II, Valsgärde 8*, Uppsala, 1954

<sup>5</sup> Müller-Wille, Michael, "Boat-graves, Old and New Views", in Crumlin-Pedersen, Ole et al (eds.), *The Ship as Symbol in Prehistoric and Medieval Scandinavia*, PNM 1, Copenhagen, 1995, p.105

<sup>6</sup> Ambrosiani, Björn, "Vendeltid", i *Vendeltid*, s.8

<sup>7</sup> 他に、1, 2 基以下だけからなる船葬墓（域）が 7 カ所、計 8 基ある。

<sup>8</sup> 舟を一艘副葬すること自体が「豊かさ」を示している。

<sup>9</sup> Norr, Svante / Sundkvist, Anneli, "Valsgärde Revisited, Fieldwork Resumed after 40 Years", *Tor*, 27-2, 1995, p.407f.

ど、王よりも一段下の社会階層に比定されるようになる。現在では、さらに、政治的・宗教的中心地だったと考えられているトゥーナ地名と船葬墓地の関係や、サットン・フーなど、イングランド・大陸の船葬墓との関連も意識されるようになり、船葬墓域をめぐる問題の総体を統一的に咀嚼・理解することは非常に困難な状況である。

それでも、これらの議論の中から船葬墓という現象について説明を与える主要な学説を抽出するなら、主要なものとして以下の二つを挙げることができる。一つは「船葬」に宗教的意識のあらわれをみるもの、一つは（社会）経済的な背景をみるものである。

北欧神話には、神々と水系の関連づけを可能にするような要素が多々含まれているが、それに関連して船葬墓造営の動機を宗教的意識にみるのが前者の理解である。たとえば、『エッダ』において、ニョルズ神の居所は Nóatún (=船-農場) と呼ばれ、寄港地かつ越冬地であったとされている。ニョルズは海の風・航行・漁・商業の神であり、サガではとくに船と河川航行の守り神としてあらわれる。ニョルズの子フレイも馬・猪にくわえて船をその象徴とし、「すべての神をのせられる船」をもっている。伝説的な『イングリング・サガ』第9-10章によれば、オージンの死後スウェーデン人たちの中で権力を握ったニョルズは王と呼ばれた。さらにそのニョルズのあとを継いで同じくスウェーデン人の王と呼ばれたフレイ（別名イングヴィ）はウップサーラを居所としてそこに神殿をたて、イングリング王家の祖となった。ウップランド、なかでもウップサーラ近郊に船葬墓が集中しているのには、以上のような事情と、それに由来するフレイ信仰がメーラル地域で特別な意味をもっていたこと、ガムラ・ウップサーラにおいて王権が成長しはじめたことに関連があるとされるのである<sup>10</sup>。この理解にもとづくなら、船葬墓は宗教的行為を媒介として、自らを神々と正統な権力（王家）に結びつけるものとして機能していたことになる。

もう一方の説においてはまったく別の方向から船葬墓が解釈される<sup>11</sup>。船葬墓が出現するヴェンデル時代からヴァイキング時代末期（鉄器時代末期）は急速に定住地が増えた時期であることを念頭におくと、船葬墓群は定住（人口）中心地には位置していないことが容易にみてとれる。つまり、人口中心地と森林地帯の境界に近いところに船葬墓群は分布しており、船葬は「周辺の現象」である。したがって船葬墓を生みだした定住地は、ヴェストマンランドや西ウップランドの比較的新しい「開拓地」であり、スヴェーア人の軍事的・政治的指導者の拠点であったとは考えられないのである。そのような「社会的機能」は定住中心地にみられるべきものである。そこで船葬墓の背景にあるとされるのが、非定住地域である森

<sup>10</sup>Schönbäck, Bengt, "Båtgravskicket", i *Vendeltid*, s.108-22

<sup>11</sup>Ambrosiani, Björn, "Background to the boat-graves of Mälaren valley", *Vendel Period Studies*, pp.17-30

林を舞台にした鉄・毛皮・枝角等、原材料品の採取・生産と手工業・商業であり、これらの活動が船葬墓の副葬品の豊かさに説明を与えてくれる。

### 船葬墓再論

上の2学説を中心に船葬墓という現象について考えなおしてみる。まず、宗教的な背景、異教信仰をみる説は、神話的内容の叙述史料を正面から扱ってしまっていること、たとえばイングリング王家（に相当する王家）をほぼ実在するものと前提しているという難点がある。また「信仰」は船葬墓が作られた「動機」を明らかにしているが、なぜ現在知られている場所に、現在知られているような船葬墓域が形成されたのかを説明しない。習慣的に「王の塚」とよばれている大墳墓に船葬でないものが多いのはなぜか。鉄器時代後期の墓のほとんどをしめる簡素な墓に、豪華な副葬は無理であるとしても、「船葬」しようとした痕跡がないのはなぜか<sup>12</sup>。これらのことを説明しない。現在に残る叙述史料との整合性が高い理論ではあるが、全面的には受け入れ困難な考えである。

背景に商業をみる考え方の中心には、船葬墓が定住のなされていない森林地帯近くに位置すること、周辺の現象であることがある。しかし、政治的・宗教的中心であったことを否定しないならば、大墳丘墓を有するガムラ・ウップサーラの位置づけに困難をきたす<sup>13</sup>。ヴァルスイエーデからガムラ・ウップサーラまで、早い馬なら15分で行く距離といわれる。経済的資源を支配しながら、政治的・軍事的指導者にならないということも考えにくい。政治的・軍事的優位の確立・維持のためには、経済的資源の支配が必要となるだろうし、「軍事力」がなければ資源の獲得や、運搬路をヴァイキング行為から確保することは困難だったはずである。

これらの研究においてはとくに注目されていないが、ヴェンデル、ヴァルスイエーデの船葬墓群には以下のような特徴があり、ソーヤーが注意を喚起している<sup>14</sup>。たとえば、前述のように、長期間にわたってとぎれることなく、船葬がおこなわれ続けたにも関わらず、船葬墓の総数が少ないことである。その数はほぼ一世代あたり一基である。その間、船葬の様式はほとんど変化していない。また豪華な副葬品は早い時期の墓に多く、800年前後を境として副葬品の「質」は下がっていく（兜、槍、太刀等が副葬されなくなる）。しかし、初期の「豪華」な副葬品、とくに武器は実用性に欠けるものが多く<sup>15</sup>、副葬品の「質低下」にともなって逆に実用性の

<sup>12</sup> もっとも、船葬墓はヴァルスイエーデ等のような土葬船葬に限らず、とくにヴァイキング時代に広く使われた小舟（鉄鋌がほとんど使用されていない）が火葬船葬に用いられた場合、ほとんど痕跡が残らないから、船葬の分布は過小評価されている可能性もある。また「船葬」には物理的痕跡を残さない非火葬水上船葬、火葬水上船葬もありうるため、問題は一層複雑である。

<sup>13</sup> Norr / Sundkvist, *op.cit.* p.408

<sup>14</sup> Sawyer, Peter, *Kings and Vikings*, 1982, London, p.50

<sup>15</sup> Arwidsson, Greta, "Valsgärde", *Vendel Period Studies*, p.72f.

高いものが副葬されるようになる。同時期、ごく少数であるが、被葬者に女性があられるという変化もある。仮に「商業背景説」にそって考えてみるなら、この副葬品の変化は商業の「収益」悪化を示すものであり、「異教信仰背景説」ならば、信仰が変化したということになる。

ウップランドにおける船葬墓の歴史的な位置について考える場合、墳丘墓との関係でみるのが有益である。社会の「上層」には、船葬墓を選んだグループと墳丘墓を選んだグループがあったわけであるが、その違いはどこにあるのだろうか。ヴェンデルなどの船葬墓とガムラ・ウプーラなどの大墳丘墓とのもっとも大きな差異は、造営に要する労働力と造営後の外観にある。労働コストの高い墳丘墓が、ある人々によって好んで作られたのは、完成後に墳丘墓が果たしうるモニュメンタルな機能を期待できたためである。墳丘墓は大きいほど目立ち、被葬者の記憶とその埋葬・継承者の権力が保たれることに寄与する。これに対し、船葬墓は完成後に墳丘墓のような機能をもつことを期待できない。ヴェンデルは完全な平地にあるし（そのため発見が遅れた）、ヴァルスイエーデはやや小高いところにあるものの、遠目には単なる丘と区別がつかない。つまり船葬墓は、副葬という形をとった「投資」とその効果のあいだに大きな差があるように思えるのである。しかしこれは、考古資料にはあらわれない部分、船葬墓への埋葬過程に注目することで理解への糸口がえられる問題である。船葬墓への埋葬がなされる際、その場で大がかりなセレモニーがおこなわれたことに疑問を差しはさむ余地はないであろう。具体的な状況を直接教えてくれる史料はないが、たとえば10世紀初め、アラブ人イブン・ファドラーンがブルガールで目撃した、「ルーシ」の首長の船葬（火葬墳丘の船葬墓）の記録からイメージをえられる。埋葬に先立って生贄などを伴う葬礼をおこない、それを参列者（地域社会）に「みせる」こと、威信行為が船葬墓造営の主目的であったと考えれば、船葬墓の特異な副葬品や、政治的モニュメントとしての機能の欠如は理由のあることとして理解可能である。こう考えるなら、副葬品の質の低下は、副葬の必要、すなわちセレモニーの「規模」をそれまでと同等の水準に維持する必要がなくなったこと、威信行為的な散財の必要性が減少したことを意味し、ほぼ一世代につき一基という船葬墓の数は、船葬に伴うセレモニーが、代替わり（財産・社会的威信の相続・継承<sup>16</sup>）に際しておこなわれた回数であると解釈できる<sup>17</sup>。そうすれば、世代／一人という墓の低い「密度」も十分納得がいくものである。このように、船葬墓を、その造営に伴う政治的な「セレ

<sup>16</sup> 豪華な副葬品の多くには著しい摩耗や修理のあとがみられ、被葬者が死の直前まで実用に供していたとは考えにくいようである。つまりサガにあるような、一族の財産として伝えられた宝の一部が副葬品とされた可能性がある。そうであるなら、船葬墓には被葬者個人を弔うという要素が少ないと言えそうである。Arwidsson, Greta, *op.cit.*

<sup>17</sup> ソーヤーは、被葬者に女性、子供が例外的であれ存在することは、船葬墓域が、地縁的ではない特定の親族集団によって維持されたことを意味すると考えている。Sawyer, Peter, "Settlement and power among the Svear in the Vendel period", *Vendel Period Studies*, p.116f.

モニー」を主たる機能とする埋葬様式として理解する方法は、ウップランド以外、とくに南スカンディナヴィアの船葬墓研究にも資するのではないと思われる。